

# 子どもの家庭内暴力と不登校を主訴として来談した 母親の心理療法過程

青 柳 宏

A Psychotherapeutic Process for a Mother Who has a son of Family violence and  
Non-attendance at School.

*Hiroshi Aoyagi*

## I. はじめに

学校教育をめぐる問題には様々なものがあり、不登校問題もその一つである。これまでに色々な対策が取られてきたが、いっこうにその数は減っていない。1998年度の不登校児童生徒数(年間30日以上欠席者)は、127,694人と前年度より21.1%の大幅増加となっている。中学校では不登校生徒の割合が2.32%となり、クラスに1人は不登校生徒がいてもおかしくない状態である<sup>10)</sup>。不登校だけでも本人や親の悩み、苦しみは相当なものがあるが、まして家庭内暴力が加わるとなるとその苦しさは想像を絶するものがある。家庭内暴力は不登校と併発して起こることも多く<sup>13)</sup>、高橋は<sup>15)</sup> 不登校相談299件中33件(11%)に家庭内暴力が見られたと述べている。米沢も<sup>18)</sup> 不登校の経過中に親への暴言、暴力が現れた例は4~5割に達するとしている。

加室は<sup>8)</sup>「家庭内暴力は他の問題行動に比べて、その激しさのゆえに親が揺さぶられて否応なしに今までの親子関係を見直し、子どもへの態度を改めざるをえなくなり、親への解決を迫る力が大きい」といっている。そのため家庭内暴力の治療としては、本人の治療はもちろんであるが、両親に対する治療・サポートが重要であるとされている<sup>1)、4)、5)、9)、16)、17)</sup>。荒木は<sup>2)</sup>「影の薄い父親の参加を促すことが治療上必要であり、母子関係・父子関係・夫婦関係の問題を解決しなくては治療が進行しないと、そのために治療チームを作る必要性」を述べている。石川も<sup>6)</sup> 治療チームと父母チームが信頼関係を育て、協体制を整える必要性を述べている。

本事例では、学校、児童相談所、保健所、地域の保護司・民生児童委員、病院、小学校の担任、アルバイト先の社長夫婦、従業員、Th(治療者)と多くの人がC1(クライアント)や両親に関わっている。連携が十分に取れているとはいえない面もあるが、それぞれの人と関わることがC1や両親にとって大きな意味を持っていたと思われる。今回は「C1」、「家族」、「社会」それぞれの関係が治療の経過と共にどう変化して行ったかを検討し、家庭内暴力への対応と治療段階について考えていきたい。

## Ⅱ. 事 例 概 要

事例内容については、秘密保持の原則にしたがい、本質を失わないように配慮しつつ変更の手を加えた。

[クライアント]

A男、15歳、中学3年生（初診時）

[主訴]

家庭内暴力および不登校。

[家族]

父親、母親、姉、A男の4人家族。父親は50代後半で、建設関係の会社で働いている。子どもに甘く、幼少時子供は2人とも父親にべたべたしていた。対外的な対人関係がもてない人で、両親面接の時も主に母親が話をし、自分から話をするとはなかった。体を横にして座り、顔を会わせようとしない。コミュニケーションを取ろうとする感じが見られない。母親は50代後半で、新聞配達をしている。やや理解力に欠けるところがあり、T hとの会話もずれてしまうことが多い。姉は高校3年生。家族の様子をよく理解している。保健所での面接でカウンセリングを勧められた際に、積極的に賛成したのが姉である。A男は几帳面で、細かいことを気にするところがあり、友達が自分の机を触るのを嫌がる。人見知りが多い。

[生育歴・現病歴]

正常分娩で出産、乳児期に問題はない。3歳ころから喘息。幼稚園では1年の夏まで、母親が朝帰るときに泣いていた。反抗期はなかった。

小学生のときは、友達ともよく遊んでいた。素直な子で、母親に甘えベッタリしていた。しかし、学校でのことや悩んでいることを親に話さない子だった。父親の方が子供に甘く、子供が悪いことをしたので母親が叱ると、父親が「うるさいからもうやめれ」と母親を注意した。

中学に入りテニス部に入部。5月にラケットケースを紛失。家族や友達が探してくれて1週間後に見つかる。蓄膿症と喘息による頭痛のため通院。6月に入り、放課後歯科医院に行く予定が、英単語のテストがわからなくて学校に残され、行けなかった。この頃から欠席が多くなり、特に月曜日の欠席が目立った。夏休みに入り、クラブから帰ったときに「明日からクラブに行かない。喘息が起きそうだから」と言って、その日以降外出せず家に閉じこもる。友達との交流もなく、一人でファミコンをしていた。

2学期になっても風邪・喘息で通院。A男は「完全に治ってから行く」と言っていた。父親の「何で学校に行けないんだ」との問いかけには「何をやっても頭に入らないから嫌なんだ」と答えた。9月の学校祭には登校。父親が飲酒後、なぜ学校に行かないのかとA男を強く叱責し暴力を振るったことを契機に、A男は母親に対して口答えをするようになり、部屋の隅に引きこもりがちになった。家庭訪問の折に担任に対しても暴言を吐くようになり、以後会うことを拒否する。

10月の姉の誕生日に「姉が洗濯物を俺のベッドに上がって干した」と姉に暴力をふるう（最初の暴力）。母親が帰宅したときは、A男は外で竿を振り回していた。学校と母親とで情報交換。学校は児相（児童相談所）へ相談に行くよう勧める。

11月は1日だけ登校。頭痛を訴える。「お前たちがうるさいから行かない」という。その後両親へ暴力をふるうようになった。母親が児相に行き、児相からは「父親が変わればA男も変わるのではないか」と父親の来所を勧められるが、以後両親とも児相に行っていない。

2年生の11月に登校の意思を示すが、登校できなかった。1月に母親と一緒に登校。2日間落ち着いた様子で登校するが、その後また家の中に引きこもる。新聞配達のアルバイトをしたいとの希望が出され、学校も許可し（母親も新聞配達を4年している）新聞配達を始める。父親は反対したが、母親が“登校することを条件”に許した（実際には登校できなかった）。父親は「母親がいつも甘い」と不満気であった。3月に2日間登校。

3年生になり、5月に母親に暴力をふるった際に外まで追いかけてきた。この時初めて近所の人に暴力を目撃される。「自室が欲しい」とのA男の希望で近所に転居。これで落ち着くかと思ったが、ますます暴力は激しくなり、見境がつかなくなった。些細なこと（姉がA男のビデオに触ったなど）がきっかけで暴力が始まる。

6月に入ってから新聞配達に行かなくなった。母親に「お前が代わりにやってこい」という。母親は自分の区域があるのでそれ以上は無理で、結局クビになった。転居後は母親に突っかかることが多くなっていったが、アルバイトをクビになってからは「お前が配達しなかったからクビになった。殺してやりたい」と暴力をふるう。また「アルバイトを探して来い」と乱暴する。母親への乱暴を父親が止めようとすると父親に、それを姉が止めようとすると姉にと、家族全員に暴力をふるう。

7月に入り、父親の親類の結婚式を口実に“A男に少し考えさせるか”と皆で家を出た。ところがそのまま鍵をかけられてしまい、翌日家に戻ろうとしても入れてくれない。入ろうとすると暴力がひどいため、両親は父親の会社の作業所に寝泊りし、姉は親類宅に身を寄せた。夏休みに入ってから、姉も作業所で両親と共に寝泊りしている。家を出た後は、父親と姉が家に入るようにしているが、5分いるのが難しい状況である。母親が行くと興奮する。父親がお金を置いてくるときは「欲しい物はないか」と声をかける。乱暴はしないが、「帰ってくるな。アルバイト探して来い」と喧嘩腰の喋り方である。保護司や民生児童委員からもA男のことで学校に連絡が入り、児相、母親も交えて学校で情報交換をする。

児相の担当者が両親と一緒にA男を訪ねるが、A男は担当者に暴行の構えを見せる。疎通姓がないこと、目がすわっていて異常に感じられたこと、母・姉は精神病院に入院させたいと思っていることから、児相では保健所に医学的検査の必要の有無を相談し、両親が保健所で精神科医師の診断を仰ぐ。医師は「病的なものは感じられない。家族がカウンセリングを受けて変わることが必要」との診断で、保健所よりThにカウンセリングの依頼があり、面接を開始する。

### Ⅲ. 治療経過

面接は、父・母面接が2回（父親は第1回と第10回に來ただけである）、母・姉面接が7回（主に第2期）、A男との面接が7回（第3期）、母親だけの面接が49回であった。

#### 第1期（第1回～第9回） X年8月～X年10月

##### [第1回]（父母面接）

保健所で両親と面接。現病歴、生育歴等を尋ねる。母親が主に話をするが、時に話が飛ぶことがあり、まとまりがない。Thの質問に対して関係のない答えが返ってくる。父親は面接中もキョロキョロと視線を合わせようとせず落ち着きがない。A男に対してはどうしていいかわからない感じである。母親は早く治してやりたいと考えているが、外部の人に危害を加えるのではないかと心配で、病院に入れることも考えたという。父親に確認すると外部の人に危害を加えることはないという。A男が「親を信用できない」と言っていることもあり、今後のことを考えると入院は適切ではないと納得したようである。父親とA男との関わりは取れそうなので、できるだけ普段の会話を多くしていくこと、A男の気持ちを安定させる関わりをしていくことを目標とする。次回から母親面接。月に1回は父親にも参加してもらい、姉の参加も考える。母親は色々話したいことがあるようなので、まずは話を聞くことにする。それからA男に対する具体的な対応を話し合っていくことにする。母親は理解力が乏しく、父親も対人関係が持てない人のようである。

##### [第2回]（この回からThの職場での面接となる。母親面接）

母親の生育歴、不登校に至るまでの経過説明。宗教のお祓いを受けているが、そこで「両親が弱いからダメだ。カウンセリングをしてもダメ。よくなる。お金もやらないで厳しくしないとダメだ」といわれた。母親は「私弱いですか」と涙を流す。母親の今までの苦勞をサポートし、今後の対応を話す。A男と父親や姉との関わりを記録してくるよう指示する。

##### [第3回～第6回]（母親面接）

母親は「A男が甘えてくる夢」、姉も「皆で住んでいる夢」を見る。両親が家を出たことについて、A男は「俺をなげいていったんでないか」と言っている。周りの人から「面接を受けてもダメ」と言われるが、母親は「来ることはいいし、話すとすっきりする」と面接に来る意味を感じている。「周囲の人は家族の辛さを判ってくれない」と涙を流す。疲れている感じである。両親が面接を受けていることをA男に話すこと、A男の様子を毎日父親か姉が見に行くこと（母親は当分行かない）を指示するが、指示通り動けない。母親の話は内容が前後することが多く、事実関係がハッキリつかめなところがある。A男は話し方が素直になってきており、父親とは話ができている。面接で決めた対応は守られていない。

校長、教頭がA男宅を訪ねるが、出てこない。その後、父、姉に学校への不満を述べ暴力。その夜「火遊びをしている」と近所から苦情が警察へ寄せられ、両親と児童係が警察へ説明に行く。近所へ挨拶に行くが、父親は黙っているだけ。両親は「他人に迷惑をかけるよりは施設へ入れて欲

しい」と児相に頼むが、児相からは「そうしないほうがよい」といわれる。9月末に両親はアパートを借りることができた（それまでは父親の作業所で寝泊まりしていた）。

[第7回～第9回]（母親面接）

「A男は“アルバイトを探してこい”の一点張りで、話にならない」と父親もあきらめ気味である。父親だけでは無理と判断し（面接へ来るようにとの呼びかけに、父親は応じない）、「両親で会いに行くこと。その時父親が中心になって話すこと。今までは母親が主に話していたが、父親の役割を明確にする意味でも父親中心で話すこと」を指示する。母親は「近所の人は大変さをわかってくれない」と涙ぐむ。

10月9日、児相主催で関係者（児相、学校、近所の住民、保護司、民生委員、保健所、Th、教育相談員）の連絡協議会を開き、A男に対する理解と対策を協議する。ThがA男の小5～6年時の担任と面談し、“週に1度手紙を書くこと、電話をすること”を依頼する。

**第2期（第10回～第24回） X年10月～X+1年2月（#10は第10回面接を意味する）**

[第10回～第17回]（父・母面接1回、母・姉の面接3回、母親面接4回）

#10: 会社の社長の勧めもあり、やっと父親が面接にくるが続かない。しかしA男については母親よりも父親の方が、A男の気持ちを理解している。母親は関係のない過去の話持ち出し、A男への理解は不十分である。#11: 姉が面接に来る。理解力もあり、A男のことも良く理解しているようである（姉は学校の都合もあり、不定期であるが何度か母親と来室）。

A男は几帳面で、細かいことが気になる。本が少しでも破れたりするとダメ。友達が机をさわったりするのもいやがる。自分の言ったことが通らないと機嫌が悪くなる。Thが「周りには少しのことでも、A男にとってはものすごく大事なことに思えるのでは」というと、理解した様子。A男が腹をたてないよう対応することを指示。A男は「早くバイト見つけて家に帰ってこい。12月中に探せ。でないとぶち殺すぞ。姉には新しいもの買ってやるのに、俺には悪いストーブよこす。欲しい物がある」とアルバイト以外の話をするようになる。

[第18回～第24回]（母・姉面接3回、母親面接4回）

#18: 両親で会いに行く。母親が「一緒に暮らすことを考えよう」と言うと、A男は「お前らがバイト探さないから一緒に暮らせない。お前たちの家を探して、殺しにいくぞ」と言う。両親がスーパーに行くというと、A男もついてくる。母親のそばから離れず、過去の出来事で母親が悪いと文句を言う。家に戻り両親が車で帰ろうとすると、後を追いかけてくる。母親は、A男が自分の気持ちを母親にぶつけていることは理解した様子である。

#19: 母親は「自分は正しいことをしてきた」と思っている。ThとしてはA男の気持ちを伝え（A男は母親が悪いと言っている）、母親が「自分は正しい（暗にA男が悪いと言っている）」と言っていたのでは、いつまでも解決しないことを伝える。A男が腹を立てない態度、話を心がけるよう指示。しかし、面接では過去の話を繰り返し涙ぐんでいるが、A男の気持ちを理解しようとしな。A男は母親を見ると態度が変わる。「一生恨んでやる。俺がこうなったのはお前の

せいだ」という。

#21:3人で会いに行く。外で母親の襟首を捕まえたまま、「バイト探さないで何やってるんだ。ぶっ殺してやる」。姉に対しては「てめえのおかげで俺の人生がダメになった」と興奮気味。A男は「バイクの免許を取りたい。危険物取り扱いの資格を取りたい。2月に行きたいところがあり、60万かかる。俺のこと考えてるのか。してやるっていう今まで何もしてくれない」と訴える。近所の人「警察呼ぶぞ」と言うと「てめえの出る幕ではない」と怒鳴り返す。母親に「てめえ俺のことかわいいのか？」と尋ね、母親が「かわいい」と答えると涙を流す。その後母と姉（父親は途中で帰っていない）をA男の部屋に入れてくれ30分程話す。「オートバイのレーサーになりたい。それで60万かかる。学校へも行きたい」と自分の夢を話す。その一方で「何も話わかってくれない。俺のことなんか何も考えてない」とベッドに突っ伏して泣く。

#22:母親を自室へ入れる。A男は「4月まで面倒見てくれるのか？ 自動車整備工になるにはどうすればいいんだ？ 学校へ行かないとダメか？ 時間割をもらって来い。バイトして札幌へ行くつもりだった」という。

#23:機嫌が悪い。A男は「レーサーになりたい。そのためのスクールに入りたい。お金が7～8万かかる」という。母親が「そんなには…」と言うと「そんならいらぬ」とドアを閉める。母親が学校からもらってきた時間割も投げ返す。いつもと同じパターンが繰り返されていることを指摘する。親がちよつとでも嫌な顔をする「そんならいらぬ」と自分から断り、後で「何もしてくれない」と文句を言う。まずA男の言ったことにならずいてから、答えること。相手の気持ちを理解するよう指示する。

#24:3人で会いに行く。「俺の言ったこと守ってくれるのか。いやなんだべ」といいながら母親の首を絞める。近所の人が出てきて「警察を呼ぶぞ」と言うと、A男は「呼べ」と怒鳴り返す。落ちてきてきたところで、部屋の中に入る。レーサーの話をするが、「札幌にはない。ヨーロッパにある。1万8000円かかる。3月にある」と話す内容も変であり、1月20日に母親が来たことも覚えていない。その後警察が来て病院に入れることを勧められ、母親も「もうこういう状態ではどうしようもないので逃げて来られないところに入れてください」と同意し、そのまま警察に連れられB病院に入院となる。父親は「A男がいない」と動揺する。母親は入院すれば解決すると思っていたようであり、面接も今日で終わりにしたいという。Thが「A男が入院をどう考えているか、今後どう対応していくかが重要なので、面接を継続していく必要がある」と述べると、母親も同意し面接を継続することにする。

【第3期】（第25回～第41回） X + 1年2月～X + 1年8月

【第25回～第29回】（母・姉面接1回、母親面接4回）

入院に対して母親は、病院に入れて良かったのか、かわいそうという気持ちもあるし、一方でご飯をきちんと食べれるしよかったのかとも思うと言う。病院からは「連れて帰ってもいいが同じ繰り返しになる。病院に任せて、カウンセリングも続けて行く必要がある。長くかかる」と言

われている。今後のA男への具体的な対応について話す、母親は関係のない話を始める。会話がズレていることを姉に確認してもらう。姉の話では、家での会話もA男がこうなってからズレがある。姉と母親との会話では、姉の方が母親のズレを修正して会話を続けるのでうまく行くが、A男は修正しようとしないのでお互いにズレてしまうと言う。今後面接の中でThと母親との会話のズレをなくしていくこと、ロールプレイを行いA男の気持ちに気づいていくこととする。

入院して3週間後に初めて両親が面会に行く。A男は泣きだし、「父親と姉には恨みがまだ少しある。母親にはない。なぜ暴力をふるったのかわからない。悪いとは思っていない。学校のことが気になる。レーサーになりたい」と言ったりする。

父親が会社を首になる。A男は「札幌のレーサースクールに入りたい。車の整備工をしたい。家に帰りたい。どうしてこうなったかはわからない」。母親が悪いの？ という問いかけにうなずく。1時間ほど穏やかに話す。

面会の時に「家に連れて帰らないのが悪い」と暴れたりする。母親の対応については、A男を説得するような言い方になっていることを指摘。そのやり方では今までの繰り返しになるので、A男の気持ちを理解する対応の仕方を具体的に指示する。うまく気持ちを理解して対応できているときもあるので、それを評価し、もっと増やしていくように話す。

[第30回～第36回] (母親面接)

A男から親への電話が多く、「明日来るの？ 本持ってきて。新聞買ってきて。〇〇が食べたい」と要求が多い。親はA男の要求どおりにしている。婦長から「甘やかしては困る。A男の欲しいものを何でも持ってこないで欲しい」といわれ、病院に行きづらくなる。Thは「婦長とよく話し合うこと。また小遣いをいくらにするかA男と話し合うこと」を指示する。

またこの時期に母親面接と平行して、Thは病院でA男と面接を行う(2週に1回)。しかし「母親が面会に来ないこと」を理由に7回で中断となる。(A1とはA男との第1回面接を意味する)

A1: 保健婦とThと2人でA男と面接。長身、髪もボサボサであり、ボーッとした感じ。口をあまり開けないで話すために声も小さい。1人で生活していたときに自分で食事を作っていたことや、レーサーの話になると笑顔も見られる。母親との関係等の話になると答えない。

A2～A5: 自分から話すことも多く、コンタクトは良好である。しかし、家族のことや中学の話になると「わからない」と話したくない様子である。自分の行動に対する理解や、その結果に対する理解はほとんどない。判らないと答えることが多い。やりたいことについては、「退院したい。カートをやりたい。整備工の資格をとりたい。プログラミングの仕事もしたい」と積極的に話す。また内面的なことについては「自分の気持ちを判ってくれないときにイライラ、モヤモヤする」というが、自分でもはっきりしないようである。

A6: 友達もでき、調子がいい感じである。親子関係図を描く。A男は母親との関係が強く、母親について「やさしい、こわい」の2面を感じている。「母親が面会に来ないので来るように伝えて」とThに伝言を頼む(この時期A男は電話を禁止されている)。

A7:入室するなり「母親が面会に来ない。母親が来ないのなら面接の意味がない。来るように伝えて」と言って、部屋を出て行く。その後A8、A9と2回とも面接を拒否。中断となる。

[Thと婦長との面談]:A男は、相手からの評価をよくするために手伝いをしたり笑顔を見せたりしている感じがある。退院したいためにやっている感じ。面接室での親子の会話は、A男が一方的に要求を出す感じで、母親がThに話していた内容とは違う感じである。親も対人関係がうまく取れないところがあるので、看護婦との関係もうまく取れていないことを伝え、話し合うことをお願いする。病院でもA男にどう対応していいか迷っているようである。

#35:両親が1ヶ月ぶりに病院へ。「なぜ来ないのか」と責められる。「病院を出たい。医者に頼んで出してくれ」と言われ、結局A男のことを聞いて医者に話すことを約束してしまう。A男はThとの面接については、「もう解決しているからいい」。母親にも「行かなくていい」と言うが、母親は「頼れるところが必要だから行く」と面接を続けることをA男に話す。

#36:「退院させて」と母親に泣いて抱きつく。医師に退院の話をするが、「無理だ」といわれる。父親は酔うと、「A男を連れて帰る。殺されてもいい」等といったりするが、現実に退院したらどうするかは何も考えていないようである。Thは、退院するしないにかかわらず両親ともに変わる必要があることを伝える。

[第37回～第41回] (母親面接)

面接への参加を父親に要請するが、参加せず。父親としてどう行動するのか考えてもらう。A男からの電話に父親が対応し、「退院させることにした」という。母親が反対すると、父親は「お前はA男がかわいくないのか。お前が異常だ。A男と2人で暮らす」という。しかし、翌朝になると「昨日は酒を飲んでいたので何も覚えていない。A男が戻ってきてても面倒見れない」という。

#39:病院からは「これ以上置いても治る見込みがないから一度退院して様子を見たら」と言われた。そう言われたら引き取るしかないと言う。一方、「両親とも退院を望んでいたんでしょ」とも言われた。病院と母親との間のコミュニケーションにもズレが見られる。A男はおとなしくしているようである。退院したらアルバイトをして、来年自動車整備学校へ行くという。父親からA男に「暴力を振るわないこと。また暴力を振るったら入院になること。それはお前を見捨てるのではなく、お前の為にそうすること」を話すように指示。

#40:両親、A男、医師の3者で話し合う。A男は医師から「暴力をふるわない、要求しない、カッとならない、薬を飲む」ことを約束させられる。約束が守れているということで8月末に退院となる。

[第4期] (第42回～第58回) X+1年9月～X+2年3月

[第42回～第45回] (母親面接)

A男は親類の人たちに「迷惑をかけてごめんね」と電話する。親への暴力については「ただの親子喧嘩だと思っていた」という。両親のどちらかがいないと寂しがる。特に母親にベッタリしており、胸を触ったりする。「本当に僕のことかわいいの?」と聞いてくるので、母親が抱っこ



してやると満足する。かなり退行しており、母親の布団に入ってきたり、「自分は3歳だ。パンツはかせて」という。父親が「自分ではきなさい」というと大人しく言うことを聞く。母親の言うことは聞かないことがあるが、父親の言うことはよく聞くようになった。母親を2~3回蹴ることがあったが、父親が注意したらすぐ止めた。父親と2人で職業安定所に仕事を探しに出かける。車の話をしたり、TVを一緒に見たりと父親と行動することが多くなった。就職の面接も何度か受ける。病院の友達に誘われて飲みに行く。

[第46回~第49回] (母親面接)

タイヤ交換のアルバイトをすることになった。前日は「眠れない」と母親と一緒に寝る。バイトは12月までの2ヶ月間で、朝9時~18時まで。毎朝「行ってきます」、帰宅後は「ただいま」と母親に抱きつく。父親が車で送り迎えをしている。寂しくなると母親の蒲団に入ってくるが、すぐ満足して出て行く。母親もA男の甘えへの対応がうまくできるようになった。バイト先の社長夫婦がよく面倒を見てくれ、時給も上げてくれた。給料日に、A男は車代として1万円を父親に渡す。母親にもカセットをプレゼントする。

[第50回~第53回] (母親面接)

父親が働けないので、母親がパートを始める。A男も「がんばってね」と励ましてくれる。「危険物取り扱い」と「車整備工」の通信教育を始める。また大きなジグソーパズルを気長にしている。A男の機嫌がよいときに話すと、わりと聞き入れてくれる。「俺のことかわいいか?」と聞いてきたり、「部屋で音楽聞いていけ、本を見ていけ」といったりする。母親は「Thに言われたことを思い出してしている」という。母親も成長していること、よくやっていることを支持する。

バイトが終了し、次の仕事を探している。バイト先の人が酒飲みに誘ってくれた。A男は「俺みたいな人でも誘ってくれた」と喜んでいて。母親の面接について、A男も父親も「もういいのではないか」というが、母親は面接を辞めることには不安がある。「もう少し勉強したい。相談するのはThしかいない」と継続を希望する。

[第54回~第58回] (母親面接)

毎日父親と職安へ行く。昼夜逆転の生活になった。通信教育の最初の課題を提出。自分で文字を書いてレポートを提出する。父親に「ぶっ殺すぞ」と言ったりするが、その後に母親がA男にうまく注意すると大人しく聞くようになった。父親に対しても、母親がA男への対応の仕方を教える。父親も理解し、うまく対応できるようになった。A男との会話も多くなった。ある時A男が「オートバイの免許取るから金をよこせ。高校へ行かないんだからいいだろう」といつてきた。母親が「行かせたくないわけではない。お前がこうなってしまったから行けない。行かせたい気持ちはあるんだ」と答えるとA男は涙を流す。母親を背負って「軽くなったね」という。

#58:A男はすごくよくなった。毎日父親と仕事探しに行っている。イライラしてもすぐ治る。通信教育の課題で2回とも85点以上取れた。A男も「やればできるんだね」と満足そうである。母親を抱っこしたり背負ったりする。「もう面接に行かなくてもいい。俺は大丈夫だ」という。母

親も大丈夫というので、面接を終了とする。

#### Ⅳ. 考 察

斎藤は<sup>12)</sup>「社会的ひきこもり」の概念の中で、システム理論の観点から不登校、家庭内暴力を論じている。そして治療の段階として、①本人と家族、家族と社会の接点が十分に回復すること。②本人と社会との接点が十分に回復すること。の2段階を述べている。また入院治療については、本人が希望した場合のみ有効であり、対人関係の経験の場としての意味をもつと述べている。今回多くの人がA男とその家族に関わっているが、治療経過の中でそれぞれのシステムがどのような関係をもち変化していったか、またA男の入院の意味について考察したいと思う。

##### [1] A男の対人関係について

##### [面接開始以前の対人関係] 図1参照

図1に見られるように、7月以前は家族とA男との関係だけであり、社会との関係は家族もA男も取れておらず、家族もA男も社会から引きこもった状態である。また家族とA男との関係も非共感的な関係であり、相互的コミュニケーションが取れておらず、A男、家族、社会それぞれが接点を持ってない状況である。それが7月に入り家族が家を出たことをきっかけに、社会（保護司、民生児童委員）がA男と家族に関心をもち、学校、児童相談所、保健所を巻き込み、家族にアプローチを開始する。ここで初めて家族と社会が接点を持ち始めたのであるが、両者の関係は十分コミュニケーションが取れているとはいえない状態である。家族のほうは渋々社会と接点を持った感じである。

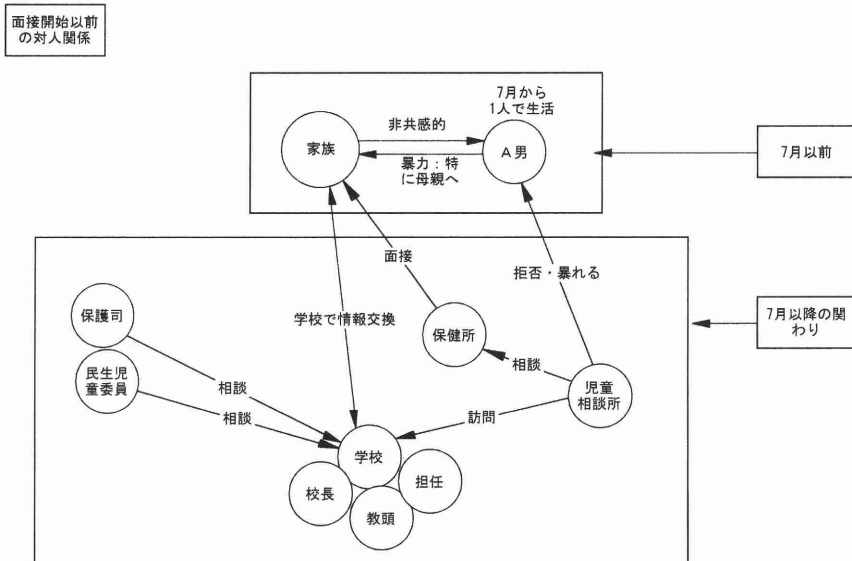


図1 面接開始以前の対人関係

[第1期 (第1回～第9回) X年8月～X年10月] 図2参照

第1期は、家族と社会との関わりが中心である。近所への挨拶や、児相、警察との関わりなどすべて母親が行っており、父親は一緒にいるだけである。面接にも父親は参加せず、母親に任せている。「いざという時に行くから」と言うが、行動が伴わない。A男に対する近所からの苦情や親の態度を責められることも多く、母親は辛さを訴える。社会との関わりを拒否したい感じがあるが、面接については、「気持ちがスッキリするので」と継続を希望する。母親は家族の代表として、Thは社会の代表として家族と社会が接点を持つことができた感じである。社会の側（特に近所住民）の不安も強く、A男についての連絡協議会を開き、対策を協議する。

A男と家族との関係は変化が見られず、A男と社会との関係も接点がない状況である。

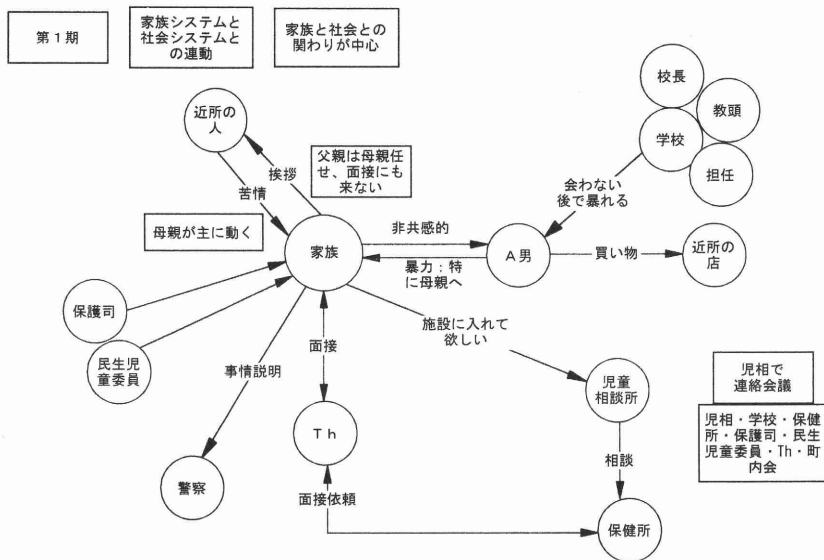


図2 第1期の対人関係

[第2期 (第10回～第24回) X年10月～X+1年2月] 図3参照

第2期に入ると、家族とA男との関わりが中心となる。A男とは父親が中心となり対応する。父親はA男の気持ちを理解しており、父親とは会話が成立する。母親はまだ共感的に対応できていないところもあるが、姉はA男の話を受け止めることができる。母親と姉が一緒の時には、A男は母親への非難や暴力だけでなく、自分の気持ちを訴えるようになる。自分が愛されているかどうかの確認を求め、「何もわかってくれない。俺のこと考えてくれない」と涙を流す。家族が受容的、共感的な対応ができるようになるにつれて、A男も自分の気持ちや辛さを話せるようになり、家族とA男との関係はプラスの方向に動き始める。

家族と社会との関係では、姉も面接に参加するようになる。しかし父親は面接には拒否的である。A男と社会との関係では、小学校時代の担任による手紙・電話のアプローチを行う。A男からの応答はなかったが、手紙は読んでいて保存してあった。

第2期	個人システムと家族システムとの運動	A男と家族との関わりが中心
-----	-------------------	---------------

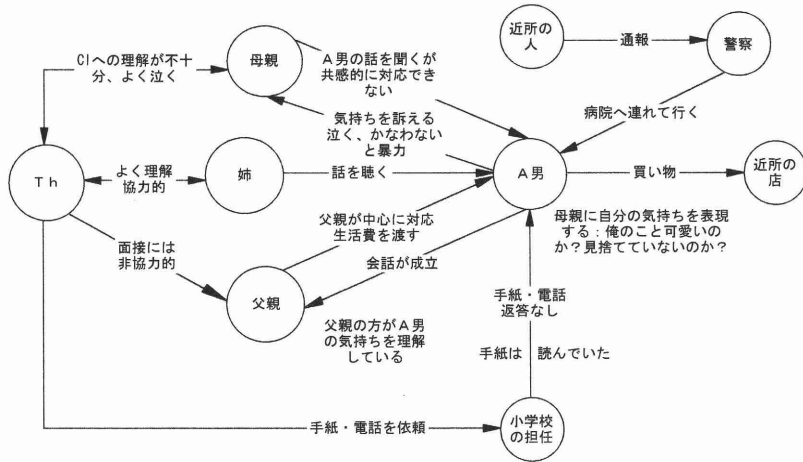


図3 第2期の対人関係

第3期	個人システムと社会システムとの運動	個人システムと家族システムとの運動	家族システムと社会システムとの運動
	A男と社会との関わり	A男と家族との関わり	家族と社会との関わり

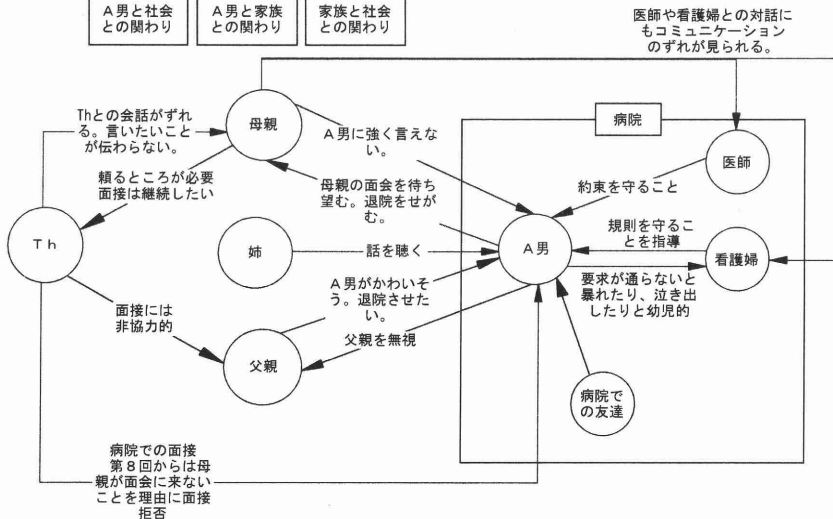


図4 第3期の対人関係

〔第3期 (第25回～第41回) X+1年2月～X+1年8月〕 図4参照

第3期はA男と社会との関わりが中心となる。今まで自分一人で生活していたが、入院することになり、病院の職員、入院患者との関わりが生じてくる。看護婦や医師は病院の規則を守ることが指導し、守れない場合は行動に制限を与えることにした。A男は要求が通らないと暴れたり、泣き出したりと幼見的な反応を示すが、次第に暴れなくなる。退院の際にも、医師と「暴力をふるわない、要求しない、カッとならない、薬を飲む」ことを約束する。初めて自分の思い通りに

ならないことに気づいたようである。病院内で友達もでき、対人関係も広がりを見せる。ThもA男との面接を開始し徐々に関係が取れるようになるが、母親が病院に来ないことを理由に中断となる。

家族との関係では、A男は母親に次々と要求を出し、母親はできるだけかなえるようにしている。母親の面会を待ち望み、母親に対してわがままほうだいに甘えている感じである。それを看護婦が甘やかし過ぎないように制限している。父親はただA男がかわいそうという感じしかなく、退院させたいと思っている。しかしA男は父親を無視している。

家族と社会との関係は、母親は面接には積極的であるが、病院との関係はうまく行かない。看護婦から「甘やかしては困る」といわれ、病院に行きづらくなると1ヶ月も行っていない。父親も看護婦と話すのが嫌という理由で一人で病院へ行けない。面接へ来ることを要請するが、非協力的である。両親とも病院側ときちんと話をする事ができず、退院についても認識がずれている。しかし土地の売買については父親が交渉し、父親としての役割を果たしたようである。母親は「退院後、暴力があっても病院に連絡するつもりはない。親としてはかわいそうなので何とかしてやりたい。できる範囲までやってみる」という。親としての覚悟を述べているように感じられた。

〔第4期 (第42回～第58回) X+1年9月～X+2年3月〕 図5参照

第4期はA男と社会との関わり、A男と家族との関わりが中心である。A男は積極的に仕事を探し、2ヶ月間アルバイトをする。バイト先の社長とその奥さんにかわいがられる。従業員から食事に誘われ、また病院の友達からも誘われ、自分が仲間と思われていることを実感したようである。

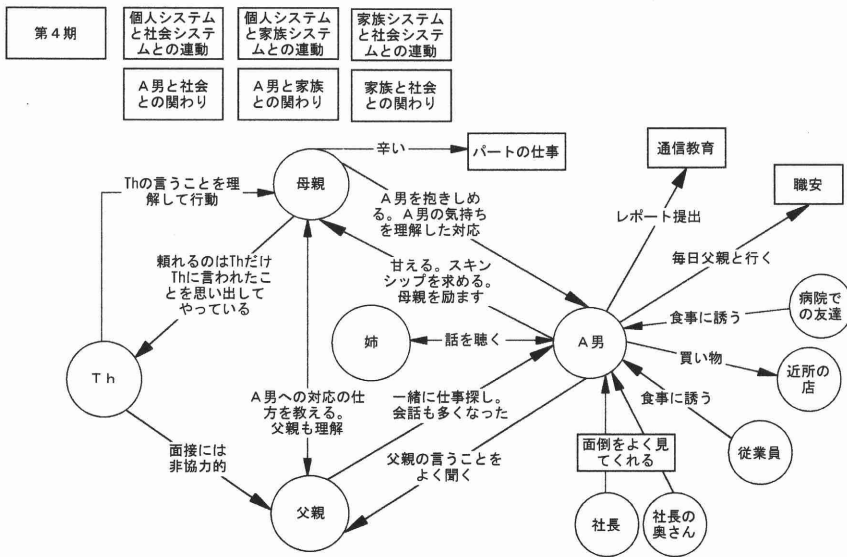


図5 第4期の対人関係

他人から認められた体験は自分の存在感を実感し、自己肯定感を強めることになったものと思われる。また仕事を通して、父性的な厳しさも体験したものと思われる。その後も毎日のように職安へ行き、面接を受け、積極的に社会に向かって飛び出そうとしている。また文字を書くことにコンプレックスを感じていたのが、通信教育を契機に自分で課題を解いて提出するようになる。その結果も満足のいくものであり、自信が持てたようである。母親のパートについても「がんばってね」と励ましたり、スキンシップも母親を抱っこしたり背負ったりと変化しており、A男の成長が感じられる。

母親との関係では、スキンシップを中心とした甘えが見られた。母親はそれを十分に受け止めている。A男の気持ちを理解した対応ができるようになり、父親へも関わり方をアドバイスしている。面接でも母親の成長が感じられる。父親もA男と行動することが多くなり、2人で出かけたり職安へ行ったりしている。テレビを一緒に見たり車の話をしたりするなど会話も多くなった。また母親を蹴った時や甘えの程度がひどい時は、父親として注意している。A男もそれを大人しく聞けるようになった。父親も成長した感じである。

## [2] A男、家族、社会の関係から見た治療の段階について 図6参照

倉本<sup>9)</sup>は不登校の子どもに対する親の対応について、「押す」と「引く」の二方向と子どもに与える影響の善し悪しで「正」と「負」の対応に分けている。図6はそれを参考に関わり方を、相手に関心を払い積極的に介入していく「能動的」な関わり方と、積極的な介入をしない「受動的」な関わり方とに分けたものである。またそれが相手にプラスの影響を与えるかマイナスの影響を与えるかで「プラス」と「マイナス」に分けている。記号の意味は、○は能動的でプラスの関わり方、●は能動的でマイナスの関わり方、△は受動的でプラスの関わり方、▲は受動的でマイナスの関わり方を示している。→は関わりを求める行為を意味している。左側はA男に対する社会・家族の関わり方、家族に対する社会の関わり方、右側は家族・社会に対するA男の関わり方、社会に対する家族の関わり方を示したものである。

## [治療以前の段階] 図7参照

長期間の不登校の場合、学校の対応も限られたものとなり、C1と家族、C1と社会、家族と社会の関係がそれぞれ固定化した関係（一方通行のコミュニケーション関係または関係が切れてしまった状態）になり変化が見られなくなる。図7の面接開始以前の関係がその状態である。7月以前はA男と家族は社会から孤立した状態であり、A男と家族との関係も相互的なコミュニケーションが取れていない。家族が家を追い出されて以後（まさにA男と家族との関係を象徴している）、家族と社会との関係が始まる。社会としては○の関わり方をするが、それは家族にとって今までの子育てに対してダメと言われている感じがありまた学校への不満もあるので、A男を何とかしたい気持ちを持ちながらも家族の社会への関わり方は消極的なものとなっている。A男に対する社会のアプローチはA男の拒否、暴力を引き起こしており、時期尚早と思われる。

## [治療の第1段階] 家族と社会の関係を修復する時期

最初の段階は家族と社会との関係を修復することが目標である。本事例では第1期がその段階にあたる。T hは受容的・共感的関わりと、A男への関わり方のアドバイスを中心とした面接を開始する。一方近所からは苦情を言われ、社会から家族への関わりは△○●のパターンとなる。家族から社会への関わりは、父親は▲であるが、母親は面接で辛さを訴え、面接には積極的に関わり○のパターンが見られるようになる。家族と社会との関係は接点を持ち始めるが、A男と家族、A男と社会との関係は変化が見られない。

**[治療の第2段階] A男と家族の関係を修復する時期**

第2期に入ると、A男と家族との関係が中心になる。面接の中でのアドバイスを少しずつ生かせ

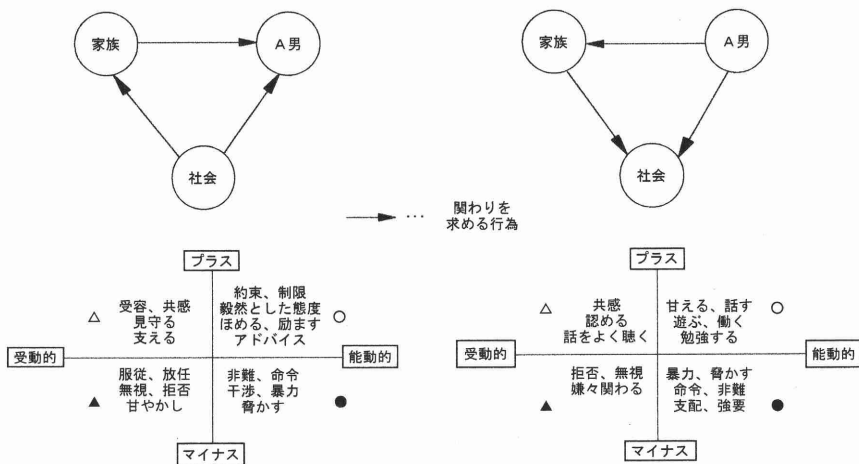


図6 関わり方のパターン

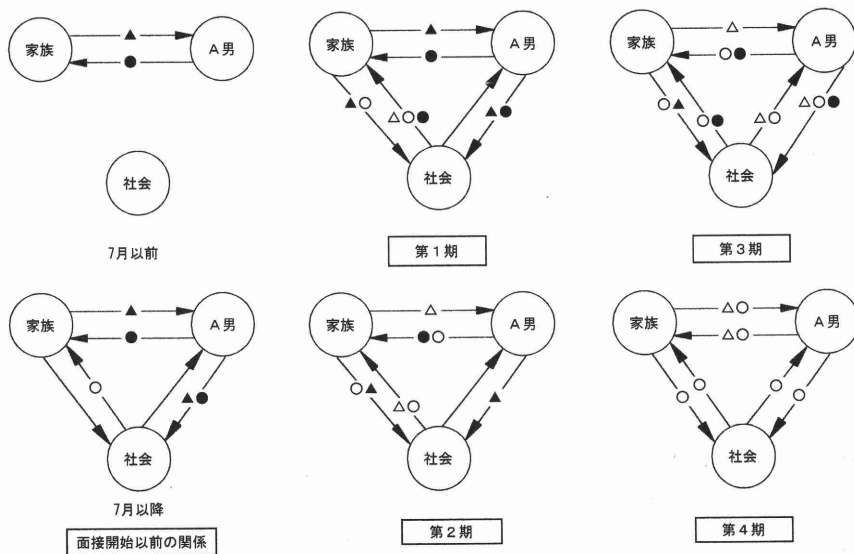


図7 A男、家族、社会との関係

るようになり、家族のA男への関わり方は△のパターンとなる。それに対応するかのようになりA男も自分の気持ちや感情を家族に吐露するようになる。A男の家族へのパターンは●○と初めて変化する。A男と社会との関わりは、社会からの直接的な関わりを控えたこともあり、暴力的な反応はなくなったが、A男からは拒否の状態であり、変化が見られない。

#### 〔治療の第3段階〕 A男と社会の関係を修復する時期（守られた場所で） 父性的体験の時期

第2期でA男と家族との関係に大きな変化が見られたので、Thとしてはこのまま治療が進展していくものと思っていたが、A男の入院という事態になった。このことはA男と社会との関係を修復する上で、さらにA男と家族との関係の上でも大きな意味を持っていたと思われる。

まず家族以外の対人関係を体験せざるをえなくなったことである。第2期までのように拒否することができず、また病院という特殊な状況の中で集団生活をする、病院の規則を守ることを義務付けられた。A男は当初要求が通らないと暴れたり泣いたりしていたが、次第に病院の規則に従って行動するようになる。また入院患者と友達になり話をするようになる。病院側の毅然とした態度により、A男に欠けていた父性的な体験をすることができたものと思われる。社会からの△○の関わり方に対して、A男も△○●と初めて肯定的な関わり方ができるようになっている。

家族との関係では、A男は「見舞いにきて欲しい、…が欲しい、退院したい」と次々と要求を出していく。家族はできるだけそれを適えようとするが、病院側の制限がありA男はすべてを満たすことはできなかった。しかしA男は家族がA男のために一生懸命関わっていることは実感できたようである。A男の家族への関わりも○●と○の方が優勢になっている。

#### 〔治療の第4段階〕 A男と社会との関係を修復する時期（現実の社会の中で）

この段階ではA男は積極的に社会と関わっていく。毎日のように父親と職安へ行き、また新聞で仕事を探し面接を受けている。現実にアルバイトをするようになり、アルバイト先の人々との対人関係もうまく行っている。通信教育も受講し、A男と社会との関係は共に○の関わり方となっている。

家族との関係も、A男は甘えたり、自分のことを話したり、親を励ましたり、また親の言うことを聞いたり、△○の関わり方をしており、また家族もA男の話聞き、励まし、誉め、時に注意したりと△○の関わり方ができるようになった。A男の成長と同時に家族の成長も感じられる対人関係のパターンになっている。

## V. お わ り に

今回の事例から治療の段階として、次の4つの段階を見出すことができた。

- ① 段階1：家族と社会との関係を修復する段階。
- ② 段階2：C1と家族の関係を修復する段階。
- ③ 段階3：C1と社会との関係を修復する段階（父性的体験の段階）。



④ 段階4：C 1と社会との関係を修復する段階。

もちろん各段階で修復される関係はその段階で完全に修復されるわけではなく、その後も継続して修復されていくものである。たとえばC 1と家族との関係は第2期(段階2)で修復が開始されるが、相互的なコミュニケーションがうまく行くようになるには第4期まで時間がかかっている。上記の段階は斎藤<sup>12)</sup>が述べた治療の2段階とほぼ一致しているが、本事例では図8に見られるように関わり方のパターンが変化する時期が明確に表れており、4つの段階に分けることができる。

	面接開始以前		第1期	第2期	第3期	第4期
	7月以前	7月以降				
A男→家族	●	●	●	●○	○●	△○
A男→社会		▲●	▲●	▲	△○●	○
家族→A男	▲	▲	▲	△	△	△○
家族→社会		→	▲○	○▲	○▲	○
社会→A男		→	→	→	△○	○
社会→家族		○	△○●	△○	○●	○

図8 関わり方の変化

C 1と家族が別々に生活しているという特殊事情はあるが、まず家族と社会との関係が改善され、次にC 1と家族との関係が改善されている。段階3と段階4は共にC 1と社会との関係を修復する段階であるが、違いは段階3が父性的な体験をすることが中心となっていることである。岩井<sup>7)</sup>は家庭内暴力について、「一個の人間として社会とかかわってゆかなければならない時期に、家族から社会への橋渡しの役割を果たす父性原理を自身の中に同一化することができないため、学校での社会化の基本となるべき役割を引き受けたり、仲間との人間関係に参加していくことができない」と述べている。また家庭内暴力の発現規制として多くの研究者が「父性の欠如」をあげている<sup>3),4),14)</sup>。そして父親が「毅然とした態度を取ること、C 1と対話すること、対決すること」が必要だとしている<sup>1),11),12)</sup>。社会との関わりを回復していくためには、C 1がまず父性的な体験をすることが必要であると思われる。段階2で家族(父親)との関係で父性的な体験をすることができれば(段階2の中に段階3も含まれるので)段階3を飛ばして段階4にいけるが、家族がその役割を取れない場合、社会との関わりの中で父性的な体験をする必要がでてくる。A男の場合それが病院での関わりであった。つまり入院することは、C 1が対人関係を経験する場としてだけのものではなく、父性的な体験をする場としても重要な意味を持つのである。さらに家族もC 1も、守られた場の中でお互いの関係を修復することができるものと思われる。

C 1、家族、社会それぞれの関係は相互的な関係であるが、家族が積極的に関わりを求めてくるとは限らないので、まず社会が家族へのアプローチを開始することが大切である。それを受けて家族がC 1への関わり方を変えていき、そのことがC 1の変容を促すのである。社会がC 1に関わるときも同じことがいえる。図8に示されているように、社会がC 1や家族への関わり方をプラスの関わり方に変えれば、それに応じてC 1も家族も変化し、成長できるのである。そしてそのような関わり方を工夫する体験を通して、社会自身も成長できるのである。

## VI. 文 献

- 1) 会田芳敏 (1998) 子供の家庭内暴力にどう対応するか。児童心理 697 金子書房;106-111
- 2) 荒木直彦 (1979) 家庭内暴力をふるう子供の親子関係。教育心理 27(12) ;944- 947
- 3) 藤原 孝 (1979) 校内暴力・家庭内暴力。教育心理 27(12) ;966- 971
- 4) 稲村 博 (1980) 家庭内暴力。新曜社
- 5) 稲村 博 (1981) 心の絆療法。誠信書房
- 6) 石川義博・青木四郎 (1986) 思春期危機と家族。岩崎学術出版社
- 7) 岩井 寛 (1980) 家庭内暴力と家族病理。季刊 精神療法 6(3) ;217- 225
- 8) 加室弘子 (1986) 家庭内暴力。こころの科学 6 日本評論社 ;85- 90
- 9) 倉本英彦 (1999) 不登校と家庭内暴力。現代のエスプリ388 思春期挫折とその克服 至文堂 ;80- 86
- 10) 文 部 省 (1999) 生徒指導上の諸問題の現状について(速報)。平成11年度スクールカウンセラー活用調査研究連絡協議会資料
- 11) 大島 剛 (1998) 子どもが家庭で暴力をふるうとき―「家庭内暴力を考える」―。季刊 心理臨床 11(1) 星和書店 ;21- 26
- 12) 斎藤 環 (1998) 社会的ひきこもり。PHP研究所
- 13) 高橋良臣 (1985) 登校拒否のカルテ。あすなろ書房
- 14) 高橋良臣 (1993) 登校拒否にかかわる25の視点。学事出版
- 15) 高橋義人・江幡玲子編 (1982) 家庭内暴力。学事出版
- 16) 田野稔郎 (1980) 家庭内暴力と登校拒否。登校拒否 詫摩武俊・稲村博 編 有斐閣 ;131- 143
- 17) 安田道夫 (1981) 家庭内暴力―その現実と処方箋。現代のエスプリ166 家庭と暴力 至文堂 ;139- 158
- 18) 米沢 宏 (1999) 登校拒否における不穏期(暴力期)の家庭の対応。現代のエスプリ388 思春期挫折とその克服 至文堂 ;158- 164